

明代以来，上海县城プランの形成とその変遷  
—中国江南地域における市鎮都市の原風景に追って—  
The formation and changes of the plan of old Shanghai town  
since the Ming dynasty:  
Seeking the original scenery of the towns in Jiang-nan region of China

鍾 翀  
Chong ZHONG

本稿では、歴史文献記録や古地図を利用しつつ、上海县城の都市プランの形成とその長期的な変化を明らかにした。また、都市歴史形態学の立場から、街路システム、市街地、建造物の平面形態の復元分析によって、江南地域における市鎮都市の歴史景観の解明を試みた。

キーワード：上海县城，都市プラン，都市歴史形態学，都市歴史景観，中国江南地域

Key words : the old Shanghai town, city plan, historical urban morphology, urban historical landscape, Jiangnan region of China

## I はじめに

アジアの都市・集落について、古地図や測量地図、または衛星画像を利用して地域ごとに検討することは、歴史都市の構造や地域文化の独自性を論じる素材とすることができる<sup>1)</sup>。中国でも「水郷」と呼ばれる江南地域には、16世紀の中頃から多数の市鎮という中小都市の繁栄の花が咲いた。その背景には、この地域の独特の地理環境や産業が関係していると考えられるが、方法論やケーススタディの不足ゆえにそれらの市鎮の歴史的景観は未だ十分に認識されているとは言えない。

上海は11世紀の北宋時代にはすでに「務」と呼ばれる市場町が形成されており、13世紀後半には「鎮」が設けられ、さらに1292年にその急速な発展と貿易港としての重要性に鑑み上海県へと昇格させた。この上海县城は、1843年のイギリスによる開港の直前まで江南水郷に立地する一般的な市鎮都市としてそのまま維持されていた。

近年、中国の学界ではコンツェンによる「都市歴史形態学的研究」が注目されている。コンツェンは、都市プランの形成には街路と街路システム、市街地とその中の小区分プロット、建造物の平面形態の3つの要素を主要なものとして、中世のイングランド北部におけるアニック城の歴史形態の変化を分析しつつ、その都市プランの形成を明らかにした<sup>2)</sup>。本稿では、上記の3

つの要素から上海の県城プランを復元し、さらにはこのような江南市鎮都市の歴史景観の解明を試みる。

## II 前近代以来の上海县城プラン

今日の上海黄浦区の「老城廂」区域（図1）では、民国初年の城壁の破棄や、「填浜築路」というもとの水路を埋め立て、代わりに街路を舗装することがあったものの、城内の交通路システムは後述するように、おおよそ明代嘉靖三十二年（1553年）の築城時の状況と比べても大きな変化はない。図1をみると、中華路と人民路による環状道路が従来の囲郭の輪郭を画しており、方浜中路、復興東路、侯家路、喬家路などの街路について、その位置や曲折は昔から存在した城内の方浜、肇嘉浜、侯家浜、薛家浜という四つの幹線水路の流路がそのまま継承されたことを物語っている。

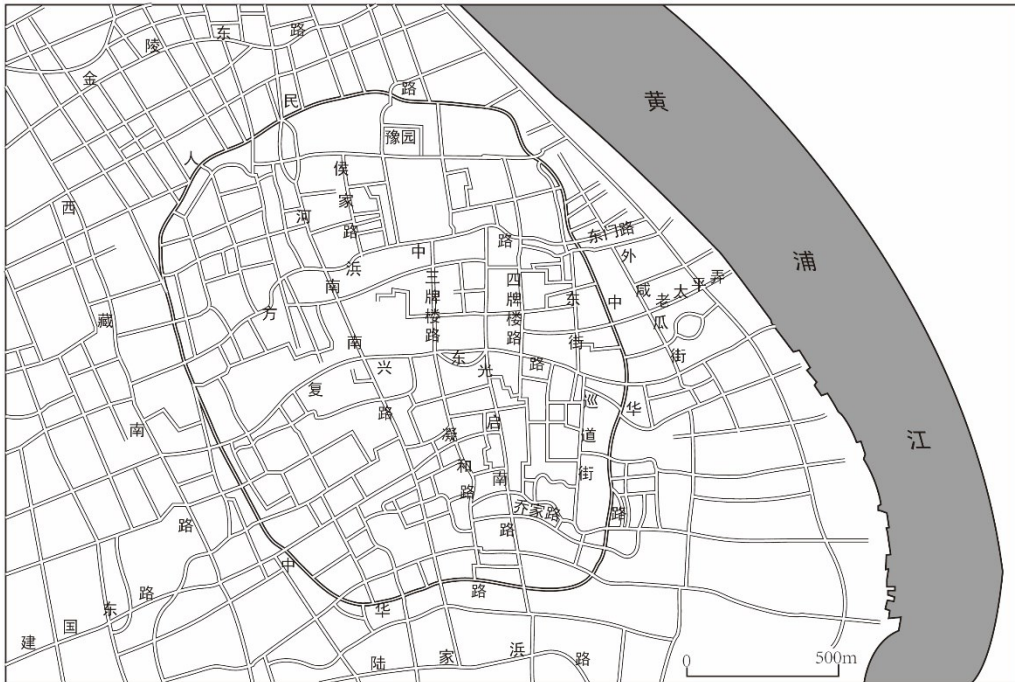


図1 現代の旧上海县城地域とその周辺の街路システム

図2は近代測量地図によって作られた「上海县城廂租界全図」（1875年）をベースマップに筆者が作成したものである。図2から、直径3里（約1.5km）、周長9里（約4.5km）の楕円形の城郭に囲まれた前近代以来の上海县城の姿がみてとれる。図2からは、市鎮都市について以下の特徴が読み取れる。

まず、「水郷」都市の交通システムとしての街路網や水路網は、一見すると迷宮のように非常

に複雑だが、幹線路について、東西は侯家浜、方浜、肇嘉浜、薛家浜とそれぞれの川沿い街路から組んだ4つの幹線交通路と、南北は老北門街—穿心街—旧教場街—三牌楼街—虹桥大街—小橋街、県前街—太卿坊巷—南門大街、天官牌坊街—四牌坊街—曲尺弯—集水弯—南梅家街、東街—道前街から組まれた4つの幹線交通路から成る、成熟した四横、四縦の網目状の幹線交通路システムが構成されたと考えられる。

次に、城外の東部の黄浦江に面する「濱浦」という近郊地域では、東西の大小様々な街路が城門の有無を問わず、東の城壁内外の多数の街路は、この城壁によって分断されている。従来は城内の街路と接続していたが1553年の築城によって分断されたとみられる。この点については、



図2 清光緒元年(1875)上海县城復元図

基図：清の光緒元年(1875)刊行の「上海县城租界全図」。右上図は、英製の City and Environs of Shanghai (1862年)の一部

同時代にイギリスが描いた実測図（図 2 右上）からみても、城内全域が市街地になったわけではなく、東半分の市街地が築城以前に、東の城壁外の集落と繋がっており、古来から発達した港町として、「濱浦」地域の市街地と連続していたと推測できる。

以上の街路システムや市街地の配置は、明代末から清代前半の地方誌の記録によって築城まで遡ることができる<sup>3)</sup>。次に県城プランに大きな変化をもたらした 1553 年の築城が市鎮都市に与えた影響に関して議論を進めたい。

### Ⅲ 明代嘉靖年間における築城の前後の都市プラン

上海県が囲郭を築くことになった原因は激しい倭寇のたび重なる襲来によるものであった。明代の嘉靖三十二年（1553）9 月に築城を開始し、11 月末に完成した。城壁を築き、6 つの城門が設けられた。これ以後、城内は賊の脅威から解放された。このことは江南の市鎮都市群の囲郭の建造史においては一例にすぎないが、同時代の 16 世紀中頃、江南において多数の県城が同様に築城していることがわかっている<sup>4)</sup>。史料の制約によりこのような築城以前の市鎮都市の構造を復元することは難しいが、幸いにも上海では、嘉靖三年（1524）に刊行された『上海県誌』において築城以前の「上海県市図」が残されている（図 3）。

「上海県市図」は、当時の上海県令に勤めた鄭洛書が編纂した『上海県誌』に収められている。この「上海県市図」には鄭洛書の在任中に建造された「義塚」や「社学」などの建物が描かれて

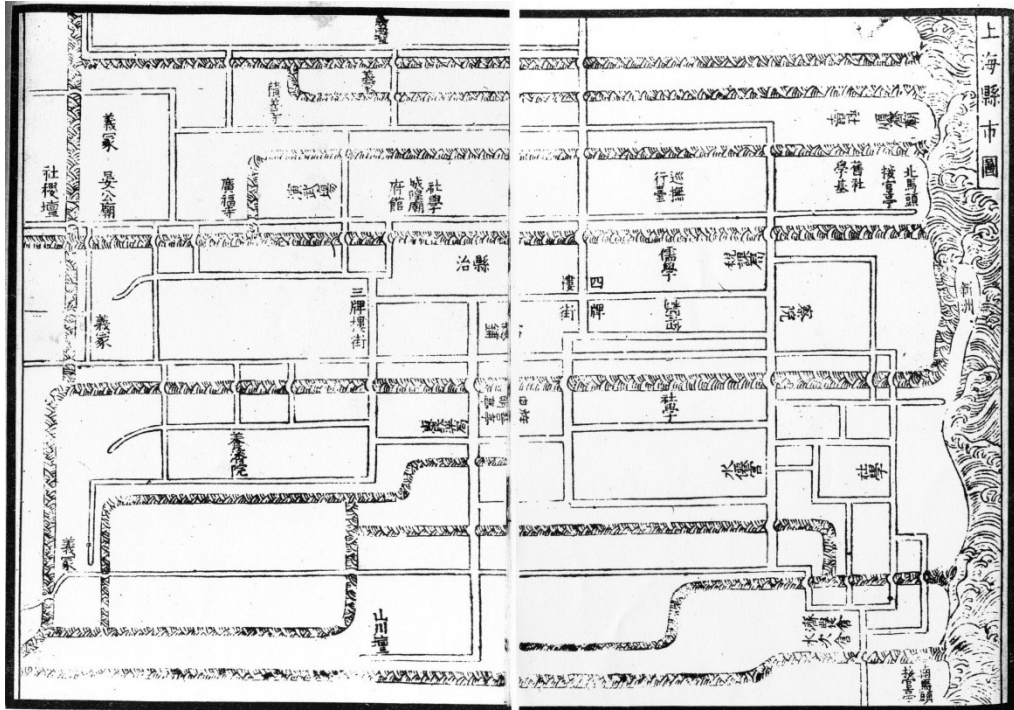


図 3 明代嘉靖三年（1524 年）刊行の「上海県市図」

おり、嘉靖三年（1524）頃の県城の様子が描かれていると考えられる。

「上海県市図」には、「県治」などの官署や「広福寺」などの寺院が 39 箇所記されている。また、図中の名称が未記載の水路についても「県治」などからみた相互的な位置関係によって「方浜」などの水路と特定できる。しかし、多数描かれている橋と街路について、それらの名称は僅かに「県治」の隣にある「三牌楼街」「四牌楼街」の 2 か所のみが描かれただけで、後世の橋や街路と簡単に対照させることが難しい。

しかし、『上海県誌』卷三「橋」にはそれらの橋を特定する手掛かりがある。すなわち、築城以前の上海県城には 38 の橋の名称が明記されており（図 4），その数は同書の「上海県市図」に描かれた橋の数と一致する。しかし「上海県市図」には橋の名称が記されていないため、やはり特定は容易ではない。しかし、上述の『上海県誌』卷三に記述された橋と、図 2 に記されている橋とを比較すると、その多くは 1875 年には残存していたことがわかった。よって、『上海県誌』卷三に列挙された橋は、それぞれ当時の侯家浜や方浜などの水路と黄浦江の合流点より西へ順次記されているという記録上の特徴があることがわかった。このことから「上海県市図」に描かれている橋のほとんどが特定できた。さらには、それぞれの橋は街路と水路の唯一の交差点であることから、「上海県市図」に描かれている名称が記されていない街路もほとんど特定することができた。

上海志卷之三	九	浦南曰唐子涇橋陸道浜橋車溝橋月河橋竹岡橋	橋六磊塘橋黃土新橋華伯橋曰罌竇湖橋在新涇	橋虹橋金巷橋曰鳴鶴橋俗呼北橋曰明心橋沙岡	澳橋對坊橋曰清河橋俗呼長橋在烏泥涇曰舊墳	跨百步塘上橋東黃浦西有龍華浮圖曰華涇橋上	周涇橋 <small>曰上竝</small> 縣之南三十三曰鄭家橋曰百步橋	在倉南水從山川壇前通榆木涇曰井亭橋楊皮橋	呼陳籬桶橋曰闢水橋尼姑菴橋 <small>曰上竝</small> 曰南倉橋	家浜橋東倉橋中倉橋西倉橋永興橋曰廣濟橋俗	侯家浜 <small>曰北</small> 曰洋涇橋邑厲壇橋韓家橋 <small>曰上竝</small> 曰薛	曰香花橋南香花橋 <small>曰上竝</small> 侯家浜 <small>曰南</small> 曰衆安橋法華菴橋	馬橋晏公橋 <small>曰上竝</small> 曰第一橋曰福佑橋俗呼黑橋	肇嘉浜 <small>曰益慶橋</small> 長生橋長興橋陳士安橋小馬橋	橋俗呼縣橋曰望虹橋登雲橋莊家橋曹家橋斜橋	橋俗呼東鰻鱺橋曰靈濟橋俗呼西鰻鱺橋曰阜民	橋縣市三十八曰五勝橋今名新橋曰郎家橋曰撫安	在二十二保	在二十保日閔行市在十六保橫瀝東曰高家行市	十一保曰東溝市在二十二保東溝浦上曰北蔡市	北曰諸翟市俗呼爲諸地在三十保曰鶴坡市在二	上海志卷之三	八
--------	---	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------------------------	----------------------	---------------------------------------	----------------------	---	--	---------------------------------------	---------------------------------------	----------------------	----------------------	-----------------------	-------	----------------------	----------------------	----------------------	--------	---

図 4 明代嘉靖三年（1524）の『上海県誌』卷三「橋」

明代以来、上海县城プランの形成とその変遷（鍾 翀）

以上の分析および作業から、「上海県市図」が刊行された時点での嘉靖三年（1524）当時の上海县城の都市プランを復元することができた（図5）<sup>5)</sup>。

図5から築城前の上海都市プランについて幾つの特徴が読み取れる。

まず16世紀の築城以前の街路システムをみると、前述した近代にみられる四横四縦の網目の状幹線交通路網（図2）はすでに形成されており、また四横の幹線路は東の黄浦江の船着場に接続し、築城以降の東城壁外の道と連なっていたことが確認できる。

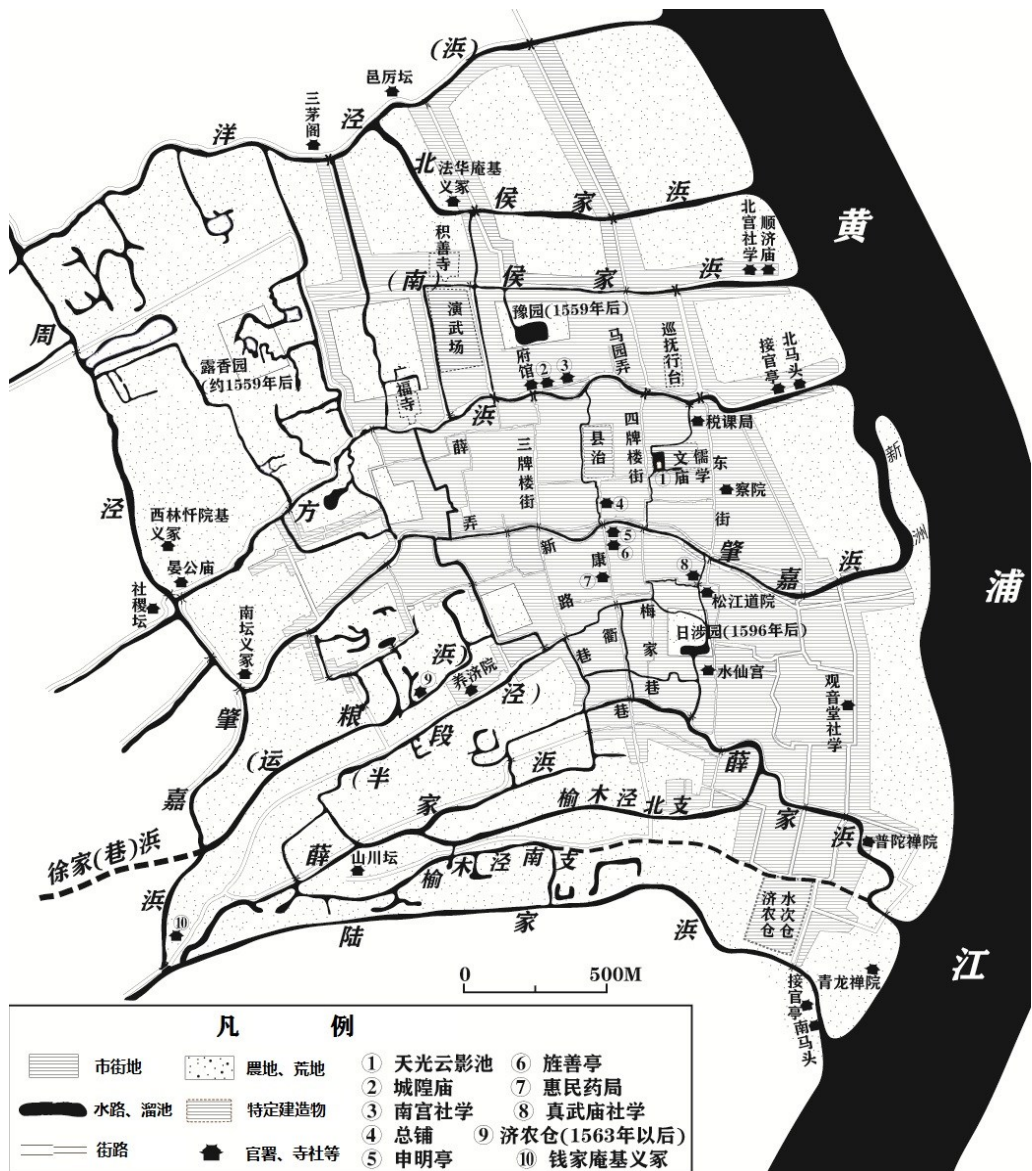


図5 明代嘉靖三年（1524）の上海県市復元図

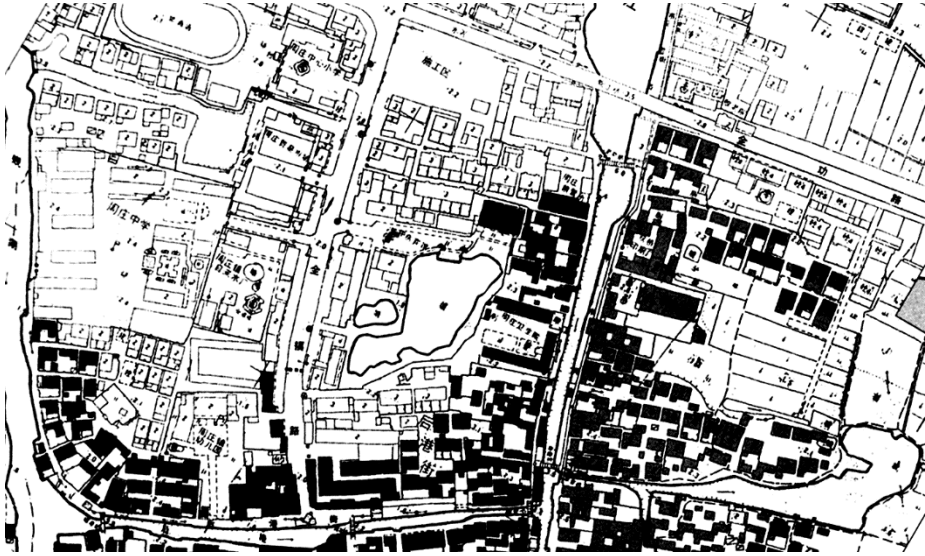


図 6-1 昆山市周莊鎮の都市プラン（北部、黒い部分は市街地）

出典：段 進・季 松等著 2002. 『城鎮空間解析—太湖流域古鎮空間結構与形態—』中国建築工業出版社, 97. に所収された「周莊鎮総平面図」の一部

次に、図 5 から、官署や寺院は当然ながら、街路や橋梁も三牌楼街から東街の間に集中していることがわかる。これによって、当時は近代の上海県城と同じく城内の東半分が集中的に市街地化していたのではないかと推察される。

以上から、16 世紀の築城以前の街路システムや市街地の分布からみても、この上海という県城は囲郭の建造より以前から成熟していたと考えることができるだろう。また、倭寇の侵入による江南の市鎮の築城が集中した時期において、都市プランから見た場合、幾何的な城壁が備わった以外にどのような変化が見られたのであろうか。次にこの点について考えてみたい。

#### IV 明代中葉、築城前後における上海の都市景観変化について

明代中葉の 16 世紀半ば頃、江南地域においては、長期間におよぶ海賊による侵入がみられ、これによって元々は水郷の農村部に散在する富裕な地主や知識人が大量に城壁を備えた県城に流入し始めた。こうした現象は上海城のみならず、江南全域に見られた。城壁を新築した府県都市には、短い期間のうちに「城居地主」という地方エリートが多く移住してきた<sup>6)</sup>。たとえば、『雲間第宅誌』には、上海に隣接する松江府の府城について以下のような変化が記されている。

「嘉、隆（明代の嘉靖、隆慶年）以前、城中には民居が寥寥たり、倭変した後、士大夫が始めて多く城居する者なり、わが家、城南に三百年余り世居し、少年の時、（城内）東南隅に皆水田なり、崇禎の末、廬舎が楡比し、殆ど隙の壤も無し。」<sup>7)</sup>

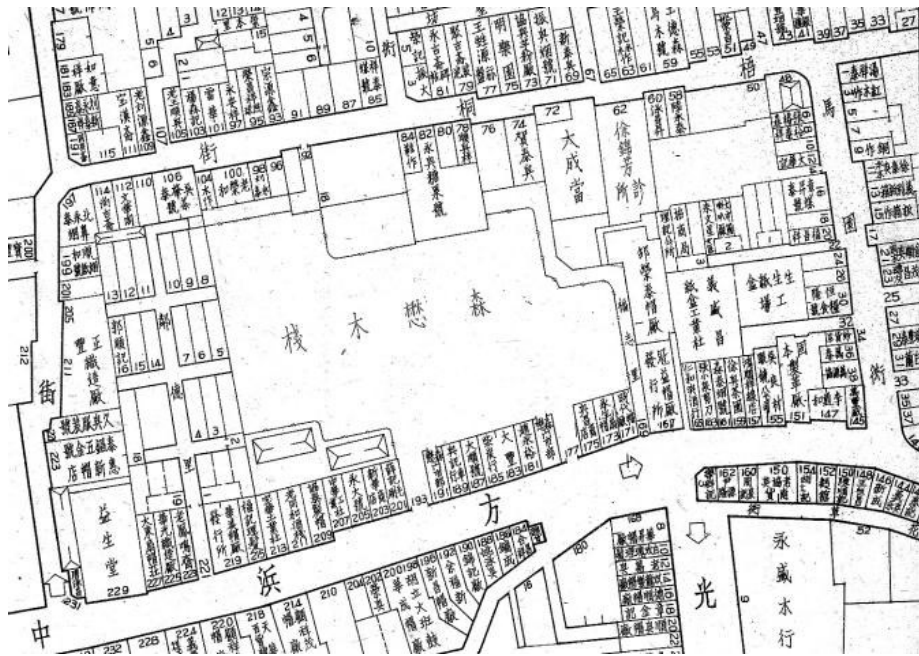


図 6-2 上海老城厢方浜地带典型街区地籍図

出典：葛 福田，鮑 士英等編 1948. 『上海市行号路図録 下冊』上海福利営業股份有限公司. に所収された「第二十五図」の一部

上海县城については、その立地や規模に大きな変化は無かったが、都市景観は大きく変わった。この点については、この時期に造られた城内の三大庭園、すなわち豫園・日涉園・露香園の記述がある。

『豫園記』には、造園の地は園主である潘允端の住居の西にあった「蔬圃」であったとあり、元は野菜の田圃であったところを利用して庭園を作ったと記述されている<sup>8)</sup>。

『日涉園記』には、園主の住居の隣に「廢圃一区、度可二十畝而羨」、すなわち元は二十畝余りの荒れ果てた田圃を利用し、庭園したと記されている<sup>9)</sup>。

『露香園記』には、城内の北隅にあった「曠地」、つまり荒地を庭園とし、その中の「露香池」という溜池だけでも十畝の面積を有したと記載されている<sup>10)</sup>。

以上の記録からみられる豫園と日涉園は、当時の城内の繁華街や市街地に立地していた。豫園のすぐ南には方浜沿いの繁華街（今日でも旧县城内における城隍廟に立地する方浜中路と呼ばれる城内随一の繁華街）であり、日涉園も城内東南部の古民居の稠密地帯に位置していた（図5）。それにもかかわらず、地価の高い繁華街の中心には、緑地や池が多く、疎なプライベートガーデンができた。古代上海のような江南市鎮に独特な都市景観を秘めていると考えられる。

江南という湿地帯においては、古くから「圩田」という農業用地が発達し、これはこの地域の原風景とみてよいと考える。江南の集落や都市を形態発生的にみると、まずは「圩田」周囲の



微高地を利用して土手や堤防を築き、その上に住宅を造ることで集落になり、そして集落が発展することで自然に線状の住宅地が形成されている。今日に至るまで江南全域には普遍的に線状の集落や市鎮都市がみられ、普及していることがわかる。たとえば、今日では周荘のような「歴史景観保存鎮市」でも、その市街地は住居に囲まれ、中心部には水田もしくは溜池がみられる例が少なくない(図 6-1)。近代期に発達した大規模な上海県城について、旧市街地内部に水田がみられたケースは確認できないが、民国時代の地籍図集からみると、同様の形態発生プロセスが推測される。その地籍図集に記載されている街区に関してひとつの事例を挙げると、前述した豫園に隣接し、方浜沿い繁華街に位置する街区のひとつを示した図 6-2 において、その周囲には極めて細分化された民居や店舗がみられる一方、中央の部分は未分割の土地である。県城内では、このような街区が普遍的であり、上海県城の長い歴史からみても、最初の「圩田」型用地から徐々に集落となり、そして市鎮へと成長したものと思われる。

## V 結び

本文で見てきたように、絵図・地図資料に基づいて集落や都市の歴史的形態を分析することにより、従来は静的・共時的な歴史文献記録に限られていたテキスト分析などの研究視野を広げ、動的に歴史的都市・集落のプランや形態の特徴と変化のプロセスの分析が可能となる。

中国の江南は数千年の長きにわたる耕作・定住の文明史がある。「都市歴史形態学的研究」という観点から捉えることにより、「水郷」という地理環境に生まれた集落・都市の特徴的な原風景に近づくことができるであろう。

(上海師範大学人文学院)

【謝辞】2000年から2006年の間、留学生として京都大学大学院人間・環境学研究所に在学し、小方登教授にご指導をいただきました。帰国後も、小方先生とは上海師範大学や上海社会科学院において一貫した学術交流を深め、素晴らしいご講演をいただきました。長い間ひとかたならぬご懇情を賜り有難く厚く御礼申し上げます。これからの健康で楽しい生活をお祈り申し上げます。

## 【注】

- 1) この分野については、以下の文献を参照。小方 登 2000. 衛星写真を利用した渤海都城プランの研究. 人文地理 52(2), 129-148, 小方 登 2003. 衛星写真で見るシルクロードの古代都市. シルクロード学研究 17, 3-37.
- 2) Conzen, M. R. G. 1960. Alnwick, Northumberland: a study in town-plan analysis. *Transactions and Papers (Institute of British Geographers)* 27, iii-122.
- 3) 清代の乾隆四十九年(1784)刊行の『上海県誌』(鳳凰出版社編 2014. 『上海県誌』鳳凰出版社. を参照)や嘉慶十九年(1814)刊行の『上海県誌』(王 大同 2018. 『上海県誌』上海書画出版社. を参照)

明代以来、上海县城プランの形成とその変遷（鍾 翀）

照），また明代の崇禎四年（1631）刊行の『〔崇禎〕松江府誌』（方 越貢・陳 繼儒編纂 1991. 『〔崇禎〕松江府誌』書目文獻出版社 を参照）に記されている街路からみて、近代上海城内の街路システムは遅くとも 17 世紀の明末時期にすでに確立したと考えられる。また、16 世紀の築城前後の街路システムに関しては本論のⅡを参照。

- 4) 馮 賢亮 2002. 城市重建及其防護体系的構成—十六世紀倭乱在江南的影響—. 中国歴史地理論叢 17(1), 11-29。
- 5) 城内の水路や「濱浦」地帯における黄浦江の岸線変化の復元作業については、以下の文献を参照。拙稿 2022. 中古以来上海城内水系変遷詳考. 上海師範大学学報 1, 51-61。
- 6) 明清時代における江南地域の「城居地主」に関しては以下の文献を参照。向 揚 2019. 浅論明末江南地主形態变化：从地主城居化趨勢開始. 讀書文摘 14, 33-36。
- 7) (明) 王 漢 1937. 『雲間第宅志』（王雲五主編『叢書集成初編』）北京：商務印書館。この文献の 3153 冊に所収。
- 8) (明) 潘 允端 1814. 『豫園記』（嘉 慶『上海県誌』，『第宅園林』（卷七））に所収。
- 9) (明) 陳 所蘊. 『日涉園記』（『竹素堂合併全集』（卷十八））上海図書館蔵 明万曆刻本。
- 10) (明) 朱察卿 1996. 『露香園記』（『四庫全書存目叢書』集部第 145 冊，『朱邦宪集』（卷六），明万曆六年朱家法刻増修本影印本）齐鲁書社。